海外学界ニュース

ハンブルク大学の印度学研究

田端哲哉

一九七〇年の四月以来今日に至る迄、筆者は西ドイツ、ハンブルク大学(Universität Hamburg)の東洋学専門部門(Fachbereich Orientalistik)に籍を置いている。而してこの間、印度学科のベルンハルト教授は、ネパールのムスタンクで研究調査中、心臓病の為に若き生涯を閉じ、アルスドルフ教授は停年退官をされて名誉教授(Emeritiert Professor)となられた。そして、両教授の後任には、三二歳と三四歳の若き正教授が迎えられるなど、印度学科には新しい伝統が生まれようとしている時期が到来し、それらを筆者は眼の当りに見聞して来た。ドイツ全体を眺めても、若き学者の台頭が著しく目立ち、特に各大学の印度学科に於ける正教授の年令層が三十代に移ろうとしているのが事実である。そこで今回紙上を借りて、ハンブルク大学印度学科の状況の一端を紹介してみることにする。

印度学科を初め、日本、中国、東南アジア、アフリカ、オリエント諸学科に代表される東洋学専門部門(F. O.)は、神学、法学、医学などと共にある十五の専門部門の中、第十番目に位置している。曾つては学部制度(例えば文学部、神学部、医学部など)を採用していたのであるが、一九七〇年一月より、Fachbereich の制度に切り換えて、F. O. の中に上述の諸学科(Seminar)は所属することとなった。F. O. では東洋学専門委員会(Fachbereichssitzung des F. O.)を設け、教授十二名、助教授(含講師)六名、助手六名、学生六名、職員二名の計三二名の代表が各ゼミナールより互選されて運営している。このF. S. d. F. O. は各ゼミナールに於て討議された人事問題、経済問題を再検討並びに決議する用らきと、各ゼミナール間への連絡面との縦横の機能を果している。印度学科よりは、この委員会に教授、助教授、助手、学生の代表に夫々一名づつが参加し、会の構成委員(Mitglieder)として活躍している。大学に於ける位置は以上の如くであるが、次に印度学科自体のシステムを見れば次の如くなっている。名誉教授一名、教授(含助教授)四名、講師二名、助手一名、図書館員一名、事務員二名である。そしてこれら各層の代表者に学生の代表者が加わって、研究室会議(Institutsratssitzung)が開かれ、会議長(Geschäftsführender Direktor)には教授が選出されて、代理者(Vertreter)には助教授からも立候補出来る制度になっている。

一九七二年八月末日で満六八歳を迎え、停年制により退官されたアルスドルフ教授は、名誉教授として授業をする義務は無いが権利を持ち、現在でも演習一課目を担当されている。教授の業績は、ただハンブルク大学印度学科への貢献のみならず、ドイツ全体の印度学の水準を高め、延いては世界の斯学へ絶大なる裨益をなした偉大と称するに相応しい学者である。今日

のドイツ印度学会を代表する学者は、アルスドルフ教授を筆頭に、Prof. Thieme (Tübingen), Prof. Hacker (Münster), Prof. Waldschmidt (Göttingen) の四人を挙げ得る。アルスドルフ教授は、ジャイナ、プラクリット、韻律、阿育王碑文、ヴェーダ、ウパニシャッド、印度文学、更にペルシャ学にも秀でた学者で、高弟には現在ベルリンで活躍中のブルーン教授がいる。因にティーメ教授は、ヴェーダ学と文法学に勝れた学者で、H. Scharfe; Wezler; H. P. Schmidt らが高弟に当る。H. Scharfe は現在アメリカに居り、彼の Kauṭilīya-Artha-Śāstra の成立が、紀元後一世紀であるとした研究報告は定説となった。H. P. Schmidt は曽つて米国のバークレー大学の教授で、現在はTübingen の Prof. Thieme の後継者として活躍している。Veda の Vrata の語義決定をなし、最近では Veda の Vācaspati についての研究発表をなした。Prof. Hacker は「ヴェーダーンタの著名な研究者として知られ、Prof. Waldschmidt は Turfanfunden のマヌスクリプトを解読し整理出版している。Prof. Härtel (Berlin) Prof. Schlingloff (München). 故 Prof. Bernhard はヴァルトシュミット教授の高弟である。Prof. Alsdorf, Prof. Thieme, Prof. Waldschmidt は夫々ドイツの、プラークリット、ヴェーダ、佛教学の代表者で共に、故 Prof. Lüders に学んだ。扨て、アルスドルフ教授の威業を拙稿にて述べるには紙幅が無くて割愛せざるを得ないが、現在教授が携わっておられる A Critical Pāli Dictionary 出版については明記しておかねばならない。C. P. D. の Chief Editor として教授自らも執筆され、又編集の任を荷なって全世界の斯界の権威者に原稿を依頼されている。Vol. II. Fascicle 7. Inda〜Ugghāṭima 1971. Copenhagen が既に出版されており、執筆者は次の通りである。Inda〜ivā…H. Kopp; is〜issagitatta…C. Caillat; issara〜iholokika…W. B. Bollée; i〜ihita…E. Pauly; u〜ugghāṭima…W. B. Bollée; General Reviser I. B. Horner. Chief Editor L. Alsdorf 教授は C. P. D. 全巻を今後数十年で完成させるべく脱稿を急いでおられる。

故ベルンハルト教授（一九三一〜七一）と本学の佐々木現順教授は佐々木教授の在独以来の親友であった事より、筆者は佐々木教授の Einführung を受け、ベルンハルト教授を訪れることが可能となった。それ故一九七〇年四月より一九七一年七月にネパールへ旅立たれる迄、短期間ではあったが、週に一度乃至二度ベルンハルト教授の研究室を訪問して指導を受ける事が出来た。又個人的な教授宅での晩餐会にも屢々招待を受け、折々に Yogavidhi の紹介とそれについての研究方法を教わる事が出来た。幾多の有益な論文を残された教授の業績の中、次に学位論文を記しておこう。Die Nominalkomposition im Tocharischen, Göttingen. 1958. これに続いて Udānavarga のテキスト、索引を相次いで出版された教授は、Udānavarga の註釈書である Udānālaṃkāra Tocharisch. A. 4 × 25 Silben im Rhythmus : 5/5/8/7 の研究に着手されており、並行して研究中であった Mātṛceta の資料調査をも兼ねて、第二回目のネパール研究旅行に出発されたのであった。チベット学にも力を注

ぎ、ムスタンクで数々の写本を購入されたのが、故郷の御両親のもとに今は置かれてある。

アルスドルフ教授の後任者はヴェツラー教授（Prof. A. Wezler）で、Tübingen の Prof. Thieme 高弟である。三四歳の教授は、文法学に於てpanbhāṣa の翻訳研究をされ、一九七二～七三冬学期にハンブルクでは言語学と哲学の両面より授業をされた。(1) Die Wahrnehungslehre des Nyāya. (2) Lektüre des Sāṃkhya-Kārikā mit Yaktidīpikā (3) Einführung in die einheimische indische Sprachphilosophie; Vākyapadīya I.

ベルンハルト教授の後任は三二歳のシュミッタウゼン教授（Prof. L. Schmithausen）で、学位はウィーンのフラウワルナー教授のもとで修得、二七歳で教授資格論文を提出した。唯識二十頌、三十頌の比較研究に於て、曾つてフラウワルナー教授の提唱した「世親二人説」を新しき観点より肯定された。Sautrāntika-Voraussetzungen im Viṃśatikā und Triṃśikā, Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd und Ostasiens XI, 1967. Band XI. Wien. 又、Der Nirvāṇa-Abschnit in der Viniścaya saṃgrahaṇī der Yogācārabhūmiḥ pp. 216 u. Konkordanz Wien. 1969. をも出版された教授は、佛教学に深い造詣を示し、将来ドイツを代表する学者となろう。

印度人のシュリニバサン博士（Dr. S. A. Śrinivasan）はアルスドルフ教授のもと Saṁkhyā tattvakaumudī の研究により学位を得たのであるが、この研究は、二七の写本を比較検討したテキストクリティークで、曾つて Garbe が出版したものを上廻わる決定版となった。本年二月 Rāmāyana についての教授資格論文を提出された。

ギリシャ語にて学位取得後、印度学で教授資格論文を提出されたメッテ博士（Dr. A. Mette）は、ジャイナ研究者である。Mūlacāra のテキストクリティークをなし、最近は、佛陀とマハービーラーの伝記を比較されて研究発表をなされた。

ベルンハルト教授の助手を勤め、現在は、ボン大学に移ったハーン博士（Dr. M. Hahn）は三一歳にしてチベット学関係の書物三冊を出版した。ボン大学では梵語を講じているが、専門は Tibetischer Text にあり、それを梵・漢・日・印各言語と如何に比較研究するかが課題であると云われる。

本年二月学位を得た若きエティケ博士は、佛教学に於て将来シュミッタウゼン教授共々この方面の希有の学者となろう事は疑う余地もない。

ドイツの学生は、兵役義務もあり、平均二二歳で大学に入学するが、高校にて基礎語学（英、佛、ギリシャ、ラテン語）を修得する故に、大学では教養課程を勉強する必要がなく、従って大学では全て専門課目を演習、講読にて学ぶ。概論的知識を欲すれば、その種の書物を入手して読む訳で、一般講義はなされていない。学生は印度学科で学位を得る為に、最底三年間基礎語学を学ばねばならない。即ち、ヴェーダ語、梵語、プラークリット（含むパーリー）、近代語の内一種の合計四種がこれである。学位を得る資格は、大学で四年間以上学ばねばならない

規定であるから、その¾は基礎語学に費す訳である。主専門学科の他に、副専門学科二つを課せられてもいる。勿論主専攻にて高度の内容を必要とする論文を提出する訳であるが、口頭試問は三学科で行なわれる。内容は、教授がその場で差し出すテキストを直ちに翻訳し得る能力を要求されるものである。従って学生は、語学中心の学問方法を身に付けるが、問題があって、それは学位修得後の就職の段になって現われて来る。即ち現在いる約三五名の学生が、将来学者として残るか、ジャーナリストとして活躍するかに就職の焦点が合わされて来る為、現代印度について社会学的観点よりの授業を要請する者も出て来ている。然し古典を無視して現代は語れぬとする教授側の意見が今は採られている。

終りにハンブルク大学印度学科一九七三年夏学期の授業課目を挙げておこう。

1. Sanskrit I A. Wezler
2. Sanskrit II S.A. Śrinivasan
3. Übungen zur rasa-Theorie : Nātyaśāstra VI-VII mit Abhinavaguptas Kommentar S. A. Śrinivasan
4. Lalitavistara A. Mette
5. Übungen zur indischen Metrik mit Beispiellektüre A. Mette
6. Erziehung im alten Indien A. Wezler
7. Patañjali's Yogasūtra A. Wezler
8. Jayantabbaṭṭa's Āgamaḍambara A. Wezler
9. Hindi I B. Singh
10. Hindi II B. Singh
11. Übersetzungsübungen Deutsch-Hindi B. Singh
12. Phonetische Übungen B. Singh
13. prosa-Lektüre (Hindi) B. Singh
14. Bengali I T. K. Das Gupta
15. Konversation in bengalischer Sprache T. K. Das Gupta
16. Prosa-Lektüre (Bengali) T. K. Das Gupta
17. Kamparāmāyaṇam-Lektüre S. A. Srinivasan
18. Besprechung neuerer Publikationen S. A. Śrinivasan
19. Tamil für Anfänger H. Anton
20. Überblick über die Tamil-Literatur des 20. Jh (1920–47) Vorlesung und ausgewählte Lektüre H. Anton
21. Die Tamilsprache auf dem Gebiet der Politik, Ekonomie, Soziologie und Kultur H. Anton

Abteilung für Kultur und Geschichte Tibets

1. Einführung ins Neu tibetische K. Lotyo
2. Phonetische Übungen K. Lotyo
3. Neu tibetische Konversation K. Lotyo
4. Kanonische Texte-Udrayana K. Lotyo
5. Die Geschichte des Klosters ḥbras spuṅs K. Lotyo

6. Texte zur tibetischen Geschichte A. Mette
7. Leichte tibetische Lektüre (Tibetisch II) A. Mette

印度学社の正式名と住所は左の如し。

Seminar für Kultur und Geschichte Indiens

2000 Hamburg 13, Rothenbaumchaussee 62, Tel.: 44 19 7 3385 Geschäftsführender Direktor: Prof. Dr. Albrecht Wezler

(トヤマ川、ハ、ハ〇) (ト)